九条はらまち

「はらまち九条の会」会報 **No.400**

2023（令和5）年11月3日（金）文化の日

1946（昭和21）年の11月3日は、日本国憲法公布の日

■ **はらまち九条の会** は、戦争放棄の憲法９条を守り、永久に「戦争をしない国・日本」であることを願い、「鈴木安蔵の出身地の九条の会」を誇りに活動する自由な市民の会です。支持政党や宗教を問わず、何の拘束もなく、匿名でも入会できます。■結成は2005年12月。会員は南相馬市原町区を中心に363名。 ■会費は年千円。隔月で会報を発行しています。

▲本会のシンボルのシール・鳩を抱く少女 ：デザイン 故・ 朝倉悠三さん 直径11.5ｃｍ カラー

おかげさまで、会報「九条はらまち」が400号に！

○2005年12月7日の「はらまち九条の会」の発足から満18年。発足と同時に会報「**九条はらまち**」を発行しこの号で400号です。それを記念して会長や事務局員の思いです。

会の設立18周年と会報400号発行を記念して

会長 平田慶肇

「はらまち九条の会」の設立18周年と会報400号を記念して“九条はらまち”の『集録③』を発行します。

この“九条はらまち”は、毎号事務局員山崎健一氏を中心に事務局全員が慎重に検討、推敲を重ねたものです。内容につきましては、決して一方に片寄らないよう鋭意注意しているつもりですが、何か御意見がありましたらお知らせ下さい。

ロシアによる一方的なウクライナへの侵攻が収らないうちに、今度はイスラエルとパレスチナとの軍事紛争の勃発など、世界中いつも何処かで戦争の火種は消えることはありません。このまま核戦争にでも進展すれば、この地球は滅亡することになるでしょう。

わが素晴らしい「日本国憲法第9条」を守ることにより、日本だけでなく全世界の平和を目指してこれからもお互い頑張って行きましょう。

会報を道しるべとして

事務局長 早坂吉彦

1947年、戦争によって失われた国内外の尊い生命の、いわば代償として日本国憲法が誕生しました。たとえ国家の命令でも、二度と戦争はしないという国民の総意が、その第九条に結実し、世界に対して「不戦の誓い」が高らかに宣言されました。

今、日々報道を通して私達の目前に明らかにされる世界の惨状と、それに乗じて戦争の準備を着々と進めている為政者達の姿を、1947年の当時と重ね合わせて見る時、人の心の有り様が依然として未開明のままであることに暗然としてしまいます。

どんな名目であれ、戦争がもたらす困難は決して権力者や強者に及ぶことなく、弱い者、幼い者にのみ押しつけられるという歴史が繰り返えされます。国民が皆、そのことに気づくのは、今度はいつのことになるのでしょう。〝国民の等しく受忍すべき〟などという判決文の一節がありましたが、能天気な裁判官もいたものです。

はらまち九条の会々報の『集録③』をせめてもの道しるべとして、今後の活動を続けていきたいものです。

（裏面に続きます）

『「九条はらまち」集録③』（No.271～401）を発行します

18年前の創刊号から発行済みの会報はまとめて『集録①』『集録②』の冊子として出版してきました。今回は会の設立18周年と会報400号を記念し、No.271～401を『集録③』として12月7日に出版します。ご希望の方は事務局員にお申し出ください。また各図書館等に収納していただく予定です。

記憶を記録した『集録③』

事務局　石田賢二

終戦の8月15日は暑い日であったようだ。蝉の鳴き声が激しく、目が覚めると辺りの景色に見覚えがなく、誰も居ないので急に不安になり泣き出した。前にもそんなことがあった。どこか農家の納屋に寝かされていたらしく、ブウンと爆音の音に目が覚め泣きだしたが、後年遠くに見たのが原町飛行場だったと知った。

それより前に小高町の八景の知人の家に避難するために、小高川の土手を歩いていた時に、空高く米軍の飛行機を目にして走り出した。叔母はすぐ目の前に見えた橋の下の藁束の中に私の手を引き身を隠した。その時の姉たちの恐怖の声が爆音と繋がったのだ。

そして穏やかな日常があり、炬燵の中で誰かの膝の中で太鼓の叩き方を教えて貰っている自分がいた。神楽囃子の笛も鳴り響く。それらの記憶の流れの中に一線が引かれているように思えて、それが戦争と平和の象徴のように思う。

記憶と記録の大切さを封書に書かれた、折々のことばに見る。日本の「憲法の話から」活字は鮮明である。訴える力を感じさせる。

記憶を記録した山が今『集録③』となって世に問うのだ。戦争と平和のはざまに何があるのだ。隠れている戦争の陰を甦らせてはならない。

「大事な話をしよう」

事務局　若松麟二

この言葉は、ロシアのプーチン大統領が自国の若者に向け、愛国心を説いた時に語りかけたフレーズです。ウクライナ侵攻後一年半以上経過し、大統領の求心力に陰りが見え始めたプーチンは、愛国心を隠れ蓑にした。

英文学者のサミュエル・ジョンソンは「愛国心は悪党どもの最後の逃げ場」と喝破しています。権力者が国民に愛国心を求める時、それは独善的で排他的思想を導き、自身の失態や失政を隠す隠れ蓑に昔から利用されてきました。日本もかつて、戦時中しきりに愛国心を煽り、結果として310万人もの戦災死亡者を出すに至りました。

今夏ＮＨＫの終戦記念番組で戦時中の悲惨な記録映像が映し出された後、招かれた学生たちに、「戦争はなぜ起きるのか」、「戦争を防ぐには」など討論になりましたが、これといった結論が出ないまま番組が終了しましたが、私ならこう答えます。「世界中の武器がなくなれば戦争もなくなる」と、愛国心は戦争を誘発させるが、人類愛は全く逆で、国境を越え宗教を越え全ての人々の人権を認め合い意見の相違があっても許容し、決して殺し合う事はしないと、私は言いたい。

「陸海空軍その他の戦力は保持せず、国の交戦権を認めない」これは日本国憲法第九条2項の条文です。世界の全ての国が憲法九条を国是とすれば、地球上から戦争が無くなるでしょう。戦争放棄こそが「大事な話」だと思いますよ、プーチンさん。イスラエル支援のバイデンさん、あなたもですよ。

“物事は一本の電話から始まる”？

事務局　山崎健一

2005年10月のある夜のこと、小学校の同級生の井上由美さんから「健ちゃん、憲法9条が危ないよ。このままでいいの」という一本の電話がありました。すぐ翌日、井上さんのお店を訪ね「九条の会をつくろう」と意気投合し、「会長は？」とお互いに顔を見合わせほぼ同時に「平田慶肇先生にお願いしよう」、「事務局員には○○さんたちに声をかけよう」とあっという間に話が進み、2カ月後の12月7日会員60名で「はらまち九条の会」が発足しました。

それからこの12月で18年。まさに「物事は一人から始まる（物事は一本の電話から始まる？）」を実感しています。十数名の事務局員はそれぞれの役割で活動してきましたが、最初の電話の井上由美さんは事務局で会計を１８年間担当し、まさに会の要です。そして由美さんの夫の井上光正さんは、事務局員一覧に記名はなくても毎年憲法記念日の折り込みチラシの作成や、毎回会報案コピーの配布など事務局会の下準備など、忙しいお店の合間をぬって動いていただき、いつも心から感謝しています。

以上、静々と会報発行や活動の下支えをされている井上さんご夫妻の紹介でした。